

第一章 思いとは

思いは目的であり手段

思うということは、人間の最も基本的な、また最も人間らしい行為であり、人の一生の最高の目的ともなることである。

それは、呼吸する、歩く、といった行為と同じように、毎日、毎瞬、私たちがしていることだ。眠っているときは、しないけれども、しているかもしれないとも思うくらい、それほど、私たちはいつも自然にも思っているものである。

人間にとって、思いとは、最高の目的であると同時に、また最高の手段、武器でもある、ということが出来る。それは、私たちの最高の能力に関係していると、私たちは思っている。それについて、反対する人はたぶんいないだろう。

そういう行為であるにもかかわらず、「思う」ということは、子どもの頃から教育されていない。

誰もが意識ある毎瞬、思いつづけ、何かある節々に思い方を変え、思い自体を自分自身のようにも思う。つまり、思う自分こそが自分であり、そこにこそ自分という人間の主体があると感じている、その「思う」という行為、思うということについて、私たちは教育されたことがないようなのである。

私はこのことに驚いている。

あるとき、人々に話しているとき、「あなたがたは、思い方を知っていますか？」と聞いたことがある。

そのとき、人みな驚いた顔は、忘れられない。「思い方」という言葉そのものに驚いたという友人が何人もいた。

私は、驚いた人々に驚いた。

しかし、私はまたその「思い方」について説くべきかどうか、長く悩んでもいたのである。

それは、この「思う」という基本的で最高の目的ともなる行いを、技術論のように、テクニクのように言うべきか、どうかという悩みだった。

思うという行為の崇高さについても、私のそこに賭ける気持ちはすこしも弱くなることはなかったが、人々の「思い方」の拙さを見るにつけ、私は「思い方」についても述べるべきだという気持ちがいよいよ強くなってきた。

私自身も思い方は拙いのである。しかし、習得した思い方が習慣化するにつけ、それは私自身の内面をきわめて自由にしたため、私は人々もまたそうすべきだということを感じずるようになった。

したがって、この本は、思うという行為による人間の最高の達成について述べるととも

に、そこへいたるための思い方の技、その方法についても述べることになるだろう。

またもう一つ、思うことについて述べる前に、思うということ、みなさんは「ほんとうの」思いのことだと思っただけだ。

それは、私たちの内側に溶けているいきいきした思いで、いままで、とくに明治以降、日本の専門家の人々のしてきたような思い方ではないものだという事だ。

たとえば「思想」である。「思考」「思惟」「思量」といった言葉のあらわすような思いではない。「哲学」という言葉はまだ遠い。まず、これら避けるのが、私のここで扱う「思い」である。

というのも、私の「思い」についてのさまざまな考え、その積み重ねは、思うための言葉を吟味することから始まり、明治以降のものの思い方を避けることによって、いきいきとした思いの世界をその後展開しえたと思うからだ。

哲学からもの思いへ

私が二十二歳の頃、いまから半世紀も前のことだ。私は、西洋哲学科の学生だった。「西洋哲学」という言葉に接すると、私はいまでも、体も精神も、ジーンとしてくる。それは、憧れであり、劣等感であり、克服しなければならぬものであり、打ち勝ち難いもの

でもあった。当時はまだ西洋哲学という学問があったと言っていていくらい、この学問のあったこと自体が、日本の世界のなかでの位置を示していたと言ってもいい。

日本の青年は、思いの世界のなかで、劣等意識のなかにあった。

私が西洋哲学科に進んだというのは、最も難しいことを考えたいからであった。真理を追究し、解き明かすためといえ、最も格好のいい説明となろう。

ぜんぶをわかりたい、ぜんぶを知りたい、ぜんぶを知るような人になりたい、その誉れのためには、ほかの見栄をぜんぶ捨ててもいい、というような気持ちである。しかし、ほんとうの意味での自信はなかった。

西洋哲学は、どうもわからない、という気がしていた。哲学は高校生の頃から読んではいたが、どうもわからなかった。とくにカントの「純粹理性批判」などがわからない。

自分は頭が悪いのだろうか。心のなかに澱のように重くよどむ苦しみにがのような苦りのようなものがあった。これはたぶん、私だけの持ったものではなく、ほとんどの知識人となろうとする学生、青年の持ったものであったろう。

これは正しいことであった。のちにわかったことでは、当時私の読んでいた岩波文庫の「純粹理性批判」は天野貞祐訳のものであったが、これはちゃんと訳されたものとは言いがたい訳書で、わかるはずがないものである。現在は、研究が進んで、最近の学者による

訳書はわかるようになっていく。

そのわからない訳書を、日本の知的な青年たちはベストセラーとし、みんながわかったという顔をしていたのだった。

これで、心のなかに澱のような、苦りのようなものが生じなかったら、むしろそのほうが異常であろう。しかし、当時の知識人になろうとする若者には、それがわからないために発狂した人も多かった。私の田舎では、よい学校に行った若者がよく発狂した。正気の人なら気が狂うような勉強を青年たちはしていた。

とくに、西洋哲学はそういう学問であった。

私はそう頭がいいとも思わなかったが、成績のうえでは一般社会の通念でいえば、頭がいいほうに属しているはずであった。ところが、西洋哲学を読むと、頭がいいどころか、んでもないものなのである。何もわからないに近い。私にわからないとすれば、失礼ながら、日本人はみんな頭が悪いということになるのだろうか。

「まさか」と思う。この苦惱、実は日本人みながしていたのであった。つまりわからぬことを考えて、わからなくてはならないという迷宮のなかにみなが入っていたのである。

それはこういうことだ。日本人の頭はやまと言葉でも思うといいが、外国語でも思うとよくないということである。そんなことは当たり前のことだが、そう言ったのは私が

初めてかもしれない。当たりまえすぎて言わないということもあるが、そのあたりまえすぎるのが、明治以降の日本の社会ではまったく無視されていた。

外国語でものを思うと、頭が悪いのは、どこの国の人もそうだ。日本の人々は、実は二重の外来語でものを考えていたのだが、その二重の外来語で考えているという自覚がなかった。それは自己分析が足りないからだろうと、私は思う。

私が哲学科を一年留年し、大学五年生になって気づいたことは、日本人が西洋哲学について考えるとき、二重訳語を使っているということだった。西洋の言葉を漢字熟語として訳する。その漢字熟語はもともと中国語である。

存在、哲学、形而上、悟性、理性、直観、概念、形象、認識、先験的、絶対矛盾……、こういう言葉で世界や宇宙、あるいは自分がわかるであろうか。こういう言葉は日常的に使っているわけではないから、頭に入ってきて来ない。

言ってみると、これらはカチンカチンの言葉で、そのなかにジュースが含まれているような気がしない。それぞれの言葉が板のような感じである。したがって、これでものを考えるとき、私たちは文字を書いた板を並べて考えているようなものだ。

中国人がこれらの漢字を使うときは、抑揚もあり、フィーリングも入ってくるであろう。日本語にもアクセントや抑揚はあるが、こういう漢字熟語には決められた抑揚がな

い。つまりこれらは生きた言葉ではない、二重の壁を越えてきた外来語なのである。

西洋の言葉を漢字という板きれにし、それらを並べて考えていたから、考えのなかに流れが起きなかった。

ここで一つ例をあげよう。この本は「思い」の本であるが、これを「思想」の本であるという、すっかり違ったイメージとなる。思いというと、私たちが何か思っているときの内側の流れのようなものをイメージするが、「思想」となると、何か出来上がった構築物のような感じとなり、そのうえ、何か立派な外来の物というイメージまで入ってくる。

ただの思うことに「立派な」「あり得そうもないもの」という評価が入ってくる。なぜか。それは「思想」が外来語であり、尊敬すべき外国の思いだからだ。「思想」という言葉には、「日本人が新たに考えだすのはとうていできそうもない」というニュアンスまで入っている。最初から、我々には無理と感じている、その劣等意識がこの言葉のニュアンスのなかにある。

日本の誰かが「私の思想は…」という、人はふきだすだろう。何をえらそうにぬかすと思うにちがいない。「私の思いは…」という、いかにも貧相な人が世に受け入れられないことを思っているというふうに感じる。思想と思いは私たちの感性によってほぼそのように分類されている。明治の日本人のインフェリオリティ・コンプレックスとまちがい

第一章 思いとは



はよほど深いものである。

思想とはゲダンケ (Gedanke) とかシンキング (thinking) やソウト (thought) の翻訳であり、欧米で生まれた思いは、格別のものとの評価を私たちはしていたのだ。これらの言葉は、外国語では簡単な日常的な言葉である。

悟性とは、英語では、*understanding* で、わかることくらいの意味である。やまとことばでいえば、ものわかりというくらいのことか。その悟性という言葉を放つとき、哲学者は胸をはったりする。ものわかりといったらどうか、というのが私の考えである。

日本人が訳語で考える理由

ここで日本びいきの人は、なんで日本人が西洋にコンプレックスをもち、そういう二重訳語を尊重するのか、となお自分のプライドをかきたてようとするかもしれない。だが、日本の人々はコンプレックスをもってあたりまえの状況にあることをけっして忘れてはならない。

現代人である私たちの思いの基本となっているヒューマニズム、デモクラシー、議会制、自由主義、人間の尊厳、科学と合理主義、資本主義、株式会社、市場経済、これらはみんな西洋の思いから生まれたものであり、西洋の発見である。日本人は何もつけ加えて